総湯に集う

ー地方における外国人居住者と地域住民のつながりを考えるー

Keywords
外国人居住者　多文化共生　地方　まちづくり

DZ17004　上野山　波粋

1はじめに

1.1背景と目的

現代の日本の産業において、外国人労働者を受け入れている職が増加しているにも関わらず、外国人を受け入れる環境づくりが日本にはまだ不十分である。それにより外国人の孤立化や外国人と地域住民との間でトラブルが起こっている。そこで外国人と日本人が互いの文化を理解し合いながら交流できる空間を提案する。

2研究の位置づけ

2.1外国人コミュニティ調査

近年日本人人口は減少する一方で在留外国人人口は増加している。令和元年 6 月現在では在留外国人人口は 282 万 9416 人で日本人人口の 2.2%を占めいる。そこで私は日本にある様々な地域に集まる外国人コミュニティについて文献調査を行った。調査から外国人のコミュニティが生まれる条件として住居・仕事・集会の３つが揃う必要があるとわかった。そのような場所で外国人が住み続けるようになると考えられる[1)]。

2.2外国人増加率の変化

2019年の東京都の外国人増加率は2018年より減少している。一方で今まで外国人受け入れ数が少なかった地方での増加率が急速に増えていることがわかった。[2)] よって、外国人居住者について考えるべきなのは地方ではないかと思う。

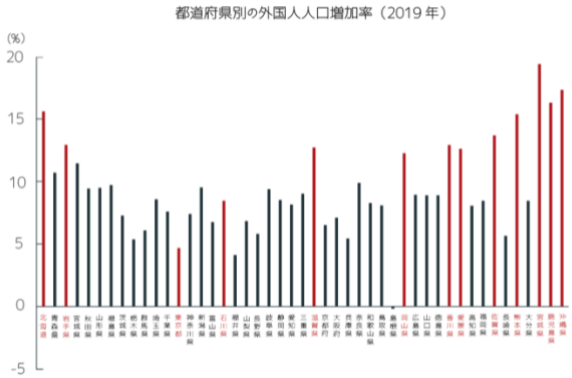


図１　都道府県別外国人増加率（2019）

2.3 PLUS KAGAプロジェクト

著者は PLUSKAGA プロジェクトというまちづくりプロジェクトに参加し、石川県加賀市で外国人居住者と地域の人を集め、交流をもてるような食事会のイベントを行った。地方で働く外国人数は増えているもののコミュニティが小さく、外国人の住まいが点在しているためコミュニティを作ることもできず、地域住民とも関わりを持たず孤立していることがわかった。また外国人増加率は高いのにもかかわらず地域住民は外国人居住者が増加していることを認識していないということがわかった。

写真１　イベント時の様子

よって地方においては外国人のためだけの空間を作っても、外国人がさらに孤立してしまうと考える。そこで今まで日本人が主として使ってきた公共空間の中に外国人を受け入れるような空間が必要になると考えた。

3計画概要

3.1対象敷地

対象地域は石川県加賀市大聖寺地区とする。
石川県加賀市の総人口数は 2019 年から 2020 年の間では 877 人減少している。一方で在留外国人数は 2019 年から 2020 年では 117 人増加している。また加賀市では外国人の働き口として多い機械製造業が発達している。

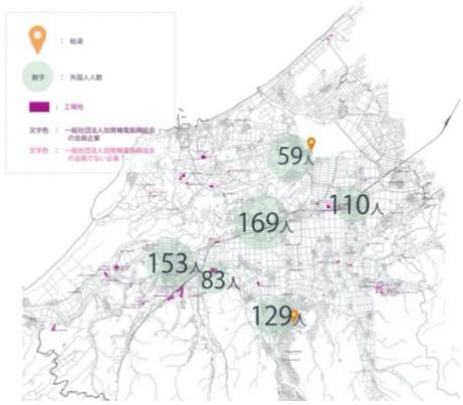


図２　加賀市の外国人人口と工場分布図

研究指導:岡野道子 准教授
Naiki Uenoyama

そこで工場の分布と外国人の分布を調査し、町と工場が近く、比較的外国人居住者数が多い大聖寺地区を対象地域とした。

図３　敷地とその周辺地図

大聖寺駅前エリアはスーパーや市役所など地域住民の生活に必要なものが揃っている。一方駅を挟んで東側には大同工業というバイクチェーン等を製造している工場が広がっている。地域住民の生活エリアと外国人が多く働く工場エリアの中間に位置する駅前を対象敷地とする。

3. 2設計趣旨

外国人居住者への対応が不十分である加賀市で外国人を受け入れる空間を持った総湯（＝共同浴場）を設計する。人が住みやすいと感じる理由の一つとして地域住民同士で日常的な情報交換（地域住民同士の関わり合い）ができることが挙げられる。加賀市では昔から温泉街の周辺に住む人とそこで働く人が日常的に総湯に入ることで日々の情報交換をしてきた。（図４）つまり加賀市で総湯に入るということは地域住民と関わりを持つ一つの手段である。しかし最近では若者の総湯離れにより利用者数が減少している。そこで地域住民も外国人も皆いち加賀市民として日常的に使えるような総湯を提案し、地域住民同士の交流も生むことができるような場をつくる。総湯を中心として誰もが自由にくつろぎ交流できる場を新たに作ることは、地域を活性化させることにつながる。

図４　山中温泉縁起絵巻

3.4建築プログラム

敷地面積：2697㎡
延床面積：2995㎡
建築面積：1684㎡
・屋内プログラム
総湯：1063㎡
(浴場：680㎡、総湯受付：83㎡、機械室：100㎡)
世界のごちそうレストラン：323㎡、カフェ：169㎡、
情報センター:268㎡（多目的ホール：71㎡）
ギャラリー&ショップ：204㎡、シェアキッチン：157㎡、ダンススタジオ:138㎡、ワークショップ工房:138㎡
ソーシャルハウス：803㎡（住戸数 21戸）
・屋外プログラム
コミュニティファーム：100㎡、デッキの広場：450㎡

4設計手法

4.1ダイアグラム

(1)街路をまとう

街路を建築にまとわせ、町から人を引き込むと同時に、人の動き視認させる。それにより裏側に行きがちな外国人の存在を表に示し互いに見えることで交流のきっかけを生む。

(2)橋を架ける

対象敷地の町側から外国人が多く働く工場へと橋を架ける。そうすることで現在分断されてしまっている町と工場をつなぎ、地域住民と外国人を繋ぐ。

4.2配置計画

対象敷地の北側（町側）には地域住民が外国の文化を知れるようにギャラリーやショップなどを配置し、また南西側（工場側）には工場で働く外国人が気軽に立ち入れるようにレストランを配置した。そして敷地の中心に総湯を配置し、町側、工場側、大聖寺駅どこからでもアクセスしやすいように計画を行った。

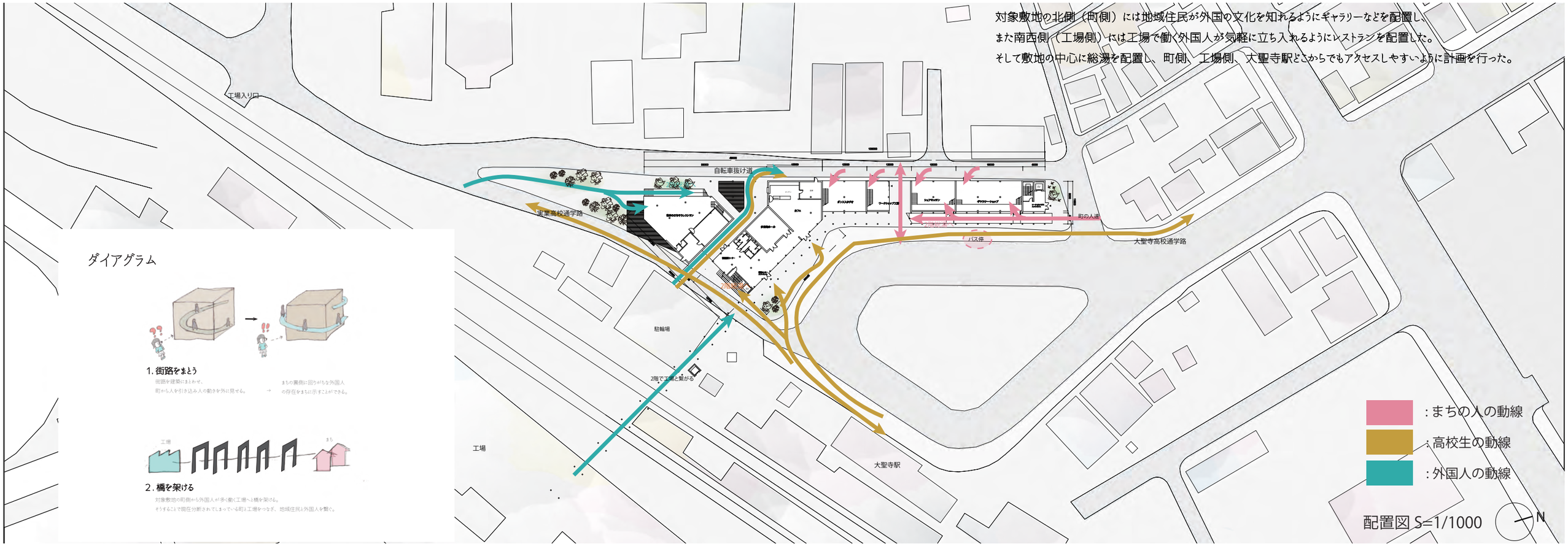
5終わりに

日本人と外国人がお互いに認め合い同じ加賀市の住民として生きていけるような場を作りたい。また今後の地域作りのためには歴史や文化の継承などだけでなく外国人の存在を受けいれながら共に暮らしていける地域づくりが必要であることを示したい。

参考文献

1)　日本の異国 /室橋 裕和
2)　みずほインサイト・政策 みずほ総合研究所

対象敷地の北側（町側）には地域住民が外国の文化を知れるようにギャラリーなどを配置し、
また南西側（工場側）には工場で働く外国人が気軽に立ち入れるようにレストランを配置した。
そして敷地の中心に総湯を配置し、町側、工場側、大聖寺駅とどこからでもアクセスしやすいように計画を行った。



ダイアグラム

1. 街路をまとう

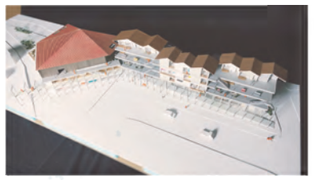
街路を建築にまとわせ、
町から人を引き込み人の動きを外に見せる。

→

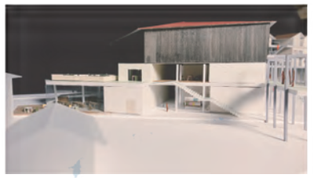
まちの裏側に回りがちな外国人
の存在をまちに示すことができる。

2. 橋を架ける

対象敷地の町側から外国人が多く働く工場へと橋を架ける。
そうすることで現在分断されてしまっている町と工場をつなぎ、地域住民と外国人を繋ぐ。



駅からの総湯



駐輪場から見る

ソーシャルハウス 共用部

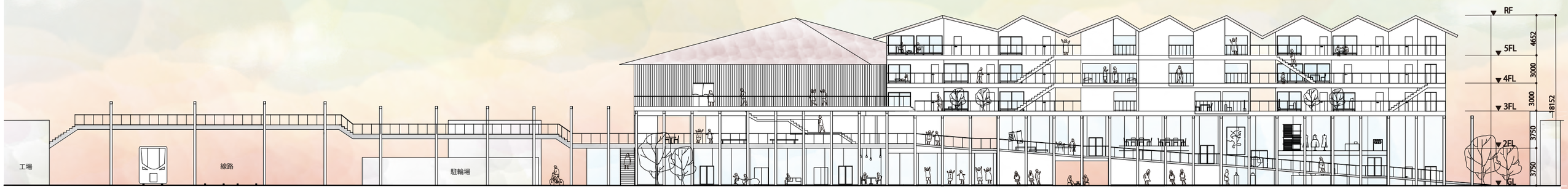
自転車の抜け道

工場側からきたのアプローチ

町側からきた人のアプローチ

総湯内観１（街路のようなコーナー）

総湯内観２（大きな浴槽部）



長手立面図　s＝1/400